ピカピカリンクの実際の活用例

～ピカピカリンクが医療連携に有効に活用された実際のケースのご紹介～

■ ケース1
脳動脈瘤患者の紹介先フォローにおける連携

【連携形態】佐賀県医療センター好生館（開示施設）× 病院（開示施設）

【患者プロファイル】80歳代　女性　B病院（開示施設）、K整形外科、M眼科に通院中

佐賀県医療センター好生館　脳神経外科部長　坂田　修治　先生

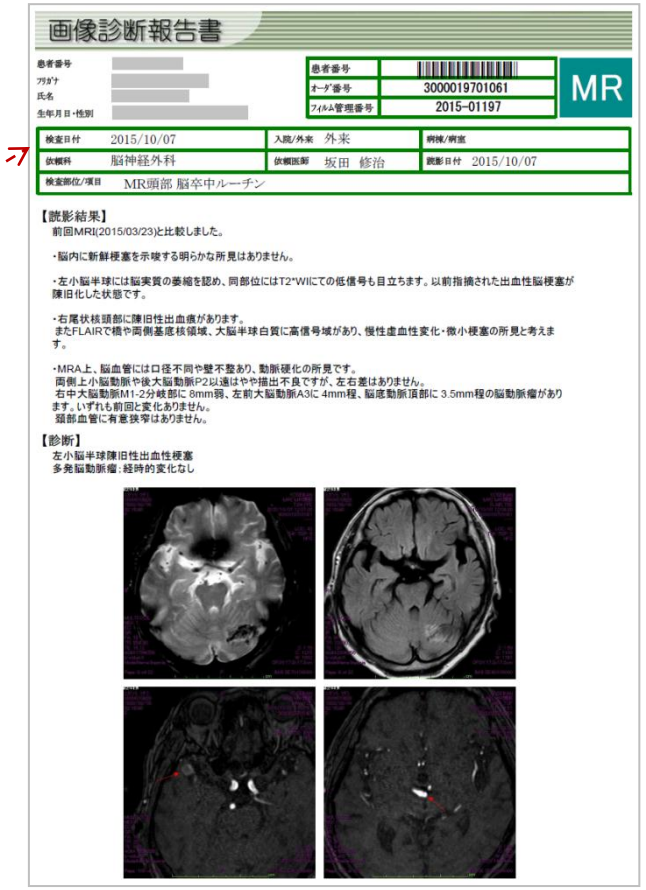
経過

- 201x年3月○日（日曜日）に構音障害・ふらつきを訴え、佐賀県医療センター好生館救急外来をウォークインで受診。検査の結果、小脳梗塞の診断により脳神経内科に入院
- 入院期間中の検査で多発脳動脈瘤を発見。約2週間の入院で薬物治療を実施
- 退院後、B病院（開示施設）での外来通院でフォロー
  退院時に好生館にて同意取得のうえ、ピカピカリンクに患者登録
- 多発脳動脈瘤の経過観察目的に、半年に1回、好生館脳神経外科を再診

ピカピカリンクの活用

- 好生館よりピカピカリンクでB病院の処方情報を確認のうえ、脳動脈瘤破裂リスクを低減するため、さらなる降圧によるコントロールを促進するよう投薬の強化を依頼した。
- 好生館におけるMRI検査の画像、読影レポート、カルテ記事をB病院担当医師がピカピカリンクで確認し、フォローに役立てた。

ピカピカリンクの活用



■ ケース1 脳動脈瘤患者の紹介先フォローにおける連携

ピカピカリンクの活用メリット

- 多発脳動脈瘤の経過を追うにあたり、好生館とB病院の間で、日頃のフォロー、処方の確認、経過を追った画像検査の情報共有が、双方向の医療情報共有の中で実現できた。
- フォロー先医療機関の医師が脳神経外科医でない場合でも、脳のMRI画像に加えて所見レポートを参照できるため、病態把握は十分に可能。検査結果や画像だけでなく、レポートやカルテ記事が参照できるメリットは大きい。
- 開示施設同士の病病連携においては、それぞれの医療機関が得意とする領域の診療科を受診している患者さんの治療経過を双方で確認できる。

■ ケース2
複数診療科受診患者の連携

【連携形態】佐賀県医療センター好生館（開示施設）× 診療所（閲覧施設）

【患者プロファイル】80歳代　女性　破裂脳動脈瘤術後、高血圧症、脂質異常症、過活動膀胱、アルツハイマー型認知症

佐賀県医療センター好生館　脳神経外科部長　坂田　修治　先生

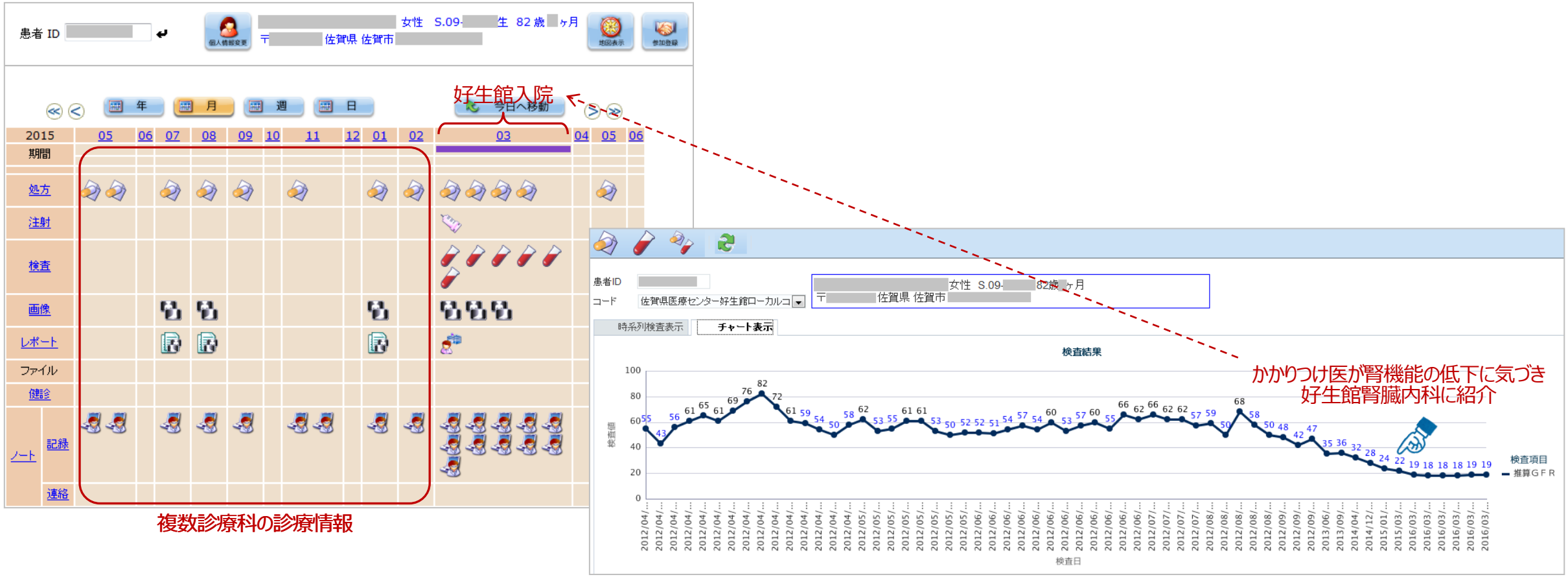
経過

- 201x年○月、くも膜下出血により佐賀県医療センター好生館脳神経外科において開頭クリッピング術・シャント術実施。約2カ月間入院
- 好生館の脳神経外科、泌尿器科、精神科に通院中
- 高血圧症、脂質異常症の外来治療に関してB内科医院に紹介
  脳神経外科退院時に好生館にて同意取得のうえ、ピカピカリンクに患者登録
- 一般内科（慢性疾患）はB内科医院で治療を実施
- 破裂脳動脈瘤・水頭症術後フォローは好生館の脳神経外科外来で経過観察（半年～1年に1度）
- 過活動膀胱治療は、好生館の泌尿器科外来通院
- アルツハイマー型認知症治療は、好生館の精神科外来通院

ピカピカリンクの活用

- 好生館において複数の診療科（脳神経外科、泌尿器科、精神科）を受診している患者さんの診療情報をかかりつけの内科医院が閲覧することにより、一般内科診療や日常フォローに役立てている。
- かかりつけ内科医が、好生館における過去の検査データを閲覧することで腎機能の低下に気づき、腎機能の問題として好生館に紹介。腎臓内科において治療が行われている。

ピカピカリンクの活用



■ ケース2 複数診療科受診患者の連携

ピカピカリンクの活用メリット

- かかりつけ医にとって、患者さんが中核病院の複数診療科を受診しているケースでは、一度患者登録をすれば受診中のすべての診療科の診療情報を閲覧可能。個々の診療科に問い合わせて情報収集する手間が不要になる。
- 複数診療科で実施した検査結果とかかりつけ内科での検査結果の比較により、病状変化の気づきが得られる。
- 中核病院においてピカピカリンクへの患者登録を行ったうえで逆紹介することにより、かかりつけ医からの紹介機会が増加する可能性が高い。

■ ケース3
遠距離通院患者の眼科検査情報を連携先病院で参照

【連携形態】佐賀大学医学部附属病院（開示施設）× 総合病院（閲覧施設）

【患者プロファイル】50歳代　男性　糖尿病、増殖糖尿病網膜症

佐賀大学医学部附属病院　眼科講師　石川　慎一郎　先生

経過

- 糖尿病のために全身状態不良の患者で、佐賀大学医学部附属病院の循環器内科で約2ヶ月ごとの経過観察を実施
- 約1ヶ月ごとの眼底検査が必要だが、毎月50km離れた大学病院に通うことは困難であるため、居住地域の総合病院において大学病院からの派遣医の診察を受診
- 201x年○月、数日前より左眼が見えにくくなったことを自覚、派遣先の総合病院で硝子体出血を確認。これまでの経過を尋ねたところ、1ヶ月前の大学病院の受診でも少量の出血が認められたが、以前とあまり変化はないと言われたということであった。
- 出血の程度が不明であるうえ、全身状態が不良であり手術適応について判断ができないことから、大学病院の循環器内科にコンサルトを依頼。眼科も同日受診とする。
  その後の併診に備えて総合病院で同意取得し、大学病院にピカピカリンクへの患者登録を申請

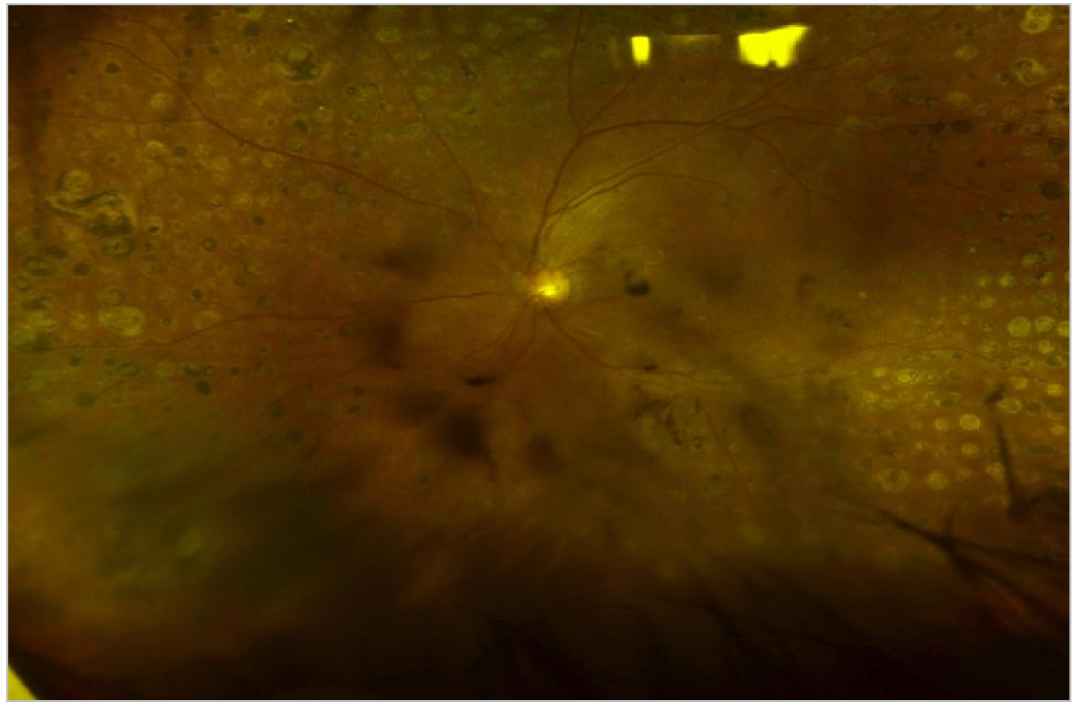
経過

- 大学病院の眼科に再診。検査結果から出血は想定内であり、経過観察が適当と判断され、眼底写真を撮影
- 1週間後に総合病院にて再診した際に、大学病院受診時の眼底写真、所見をピカピカリンクで確認
- 大学病院受診時の所見と比較して出血は改善傾向であったことから、通院に負担がない総合病院で経過観察とし、その後は出血の消退傾向を認めている。

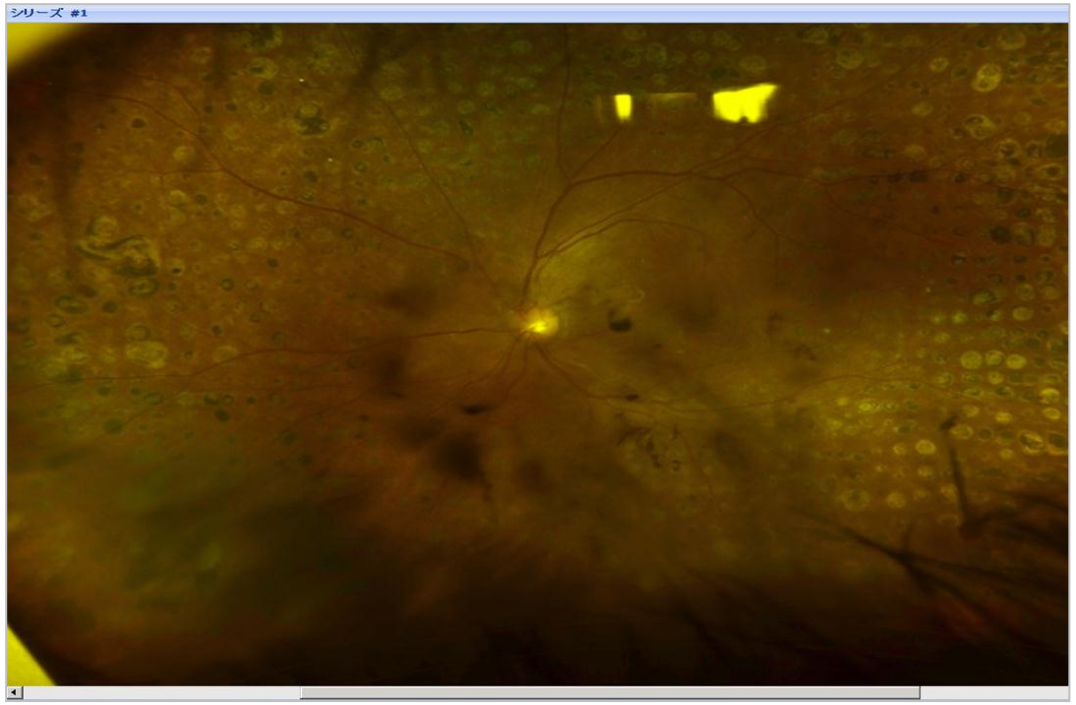
ピカピカリンクの活用

- 大学病院の光学眼底撮影装置で検査した眼底写真を、派遣先の総合病院でピカピカリンクにより閲覧
- 「出血」という定量化しにくい事象を、ピカピカリンクで閲覧した眼底写真により微細な部分まで確認でき、自信を持って病状が軽快していると判断することができた。従来はプリントアウトした眼底写真をFAXで伝送してもらう以外に迅速な確認方法はなく、画像が潰れてしまうため出血の程度を判断するのは困難だった。
- ハイリスク症例であり、事前にピカピカリンクに登録がなされていれば、大学病院での診察を回避することも可能であり、患者負担をさらに減らすことができると考えられた。
- 2014年1月に病院情報システムを更新し、眼科や耳鼻咽喉科などの自科検査による画像データをPACSに格納する環境を整備していたため、ピカピカリンクで閲覧ができた事例である。

ピカピカリンクの活用



オリジナル画像



ピカピカリンク画像
（オリジナルと遜色なく、微細な部分まで確認可能）

■ ケース3　遠距離通院患者の眼科検査情報を連携先病院で参照

ピカピカリンクの活用メリット

- 医療資源が乏しい地域に高水準の医療を提供するために、高品位で定量的な医療情報（画像データ）を得ることが可能なピカピカリンクは非常に有用
- 病状の変化が予測される症例については、積極的にピカピカリンクに患者登録を行うことにより患者さんの通院負担を軽減可能
- 慢性進行性の緑内障では、視野検査データをピカピカリンクで閲覧できる環境があると、5年前のデータであっても変化のスロープを読み取ることができ、早期の治療開始を実現できると考える。

■ ケース4
慢性C型肝炎のインターフェロン治療導入・実施連携

【連携形態】矢ヶ部医院（閲覧施設）× 佐賀大学医学部附属病院（開示施設）

【患者プロファイル】60歳代　女性　かかりつけ医（矢ヶ部医院）通院、大学病院肝臓内科通院

医療法人純伸会　矢ヶ部医院　院長　矢ヶ部　伸也　先生

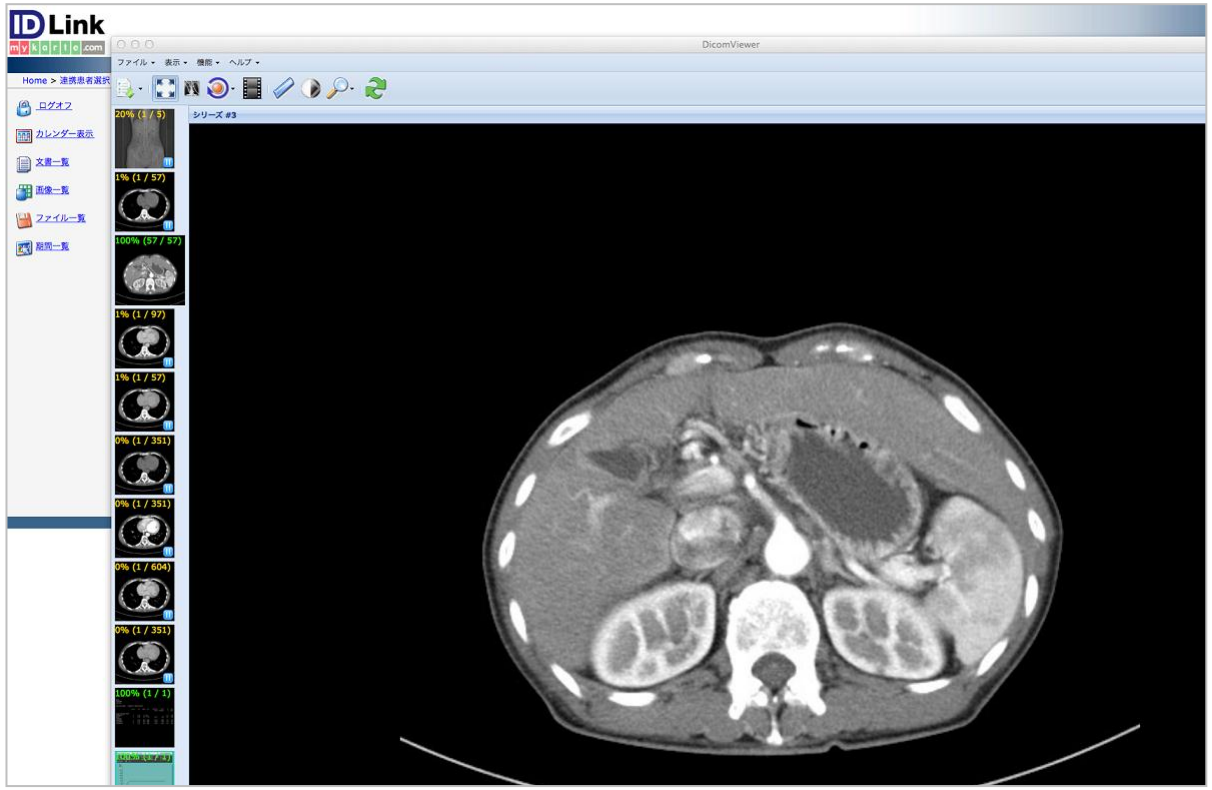
経過

- 以前から健康診断で慢性C型肝炎を指摘されていたが、長年放置
- 201x年○月、感冒でかかりつけ医を受診。その際にC型肝炎のインターフェロン治療を進めた。
- かかりつけ医ではC型肝炎のインターフェロン導入を行っていなかったので、佐賀大学医学部附属病院の肝臓内科に導入依頼のため紹介
  紹介時にかかりつけ医で同意取得のうえピカピカリンクに患者登録
- 大学病院で精査の後、インターフェロン皮下注射を週に1度行うことを決定
  かかりつけ医で採血データ、画像データを基に患者説明を行い、インターフェロン皮下注射を実施
  大学病院の肝臓内科を半年に1度、フォロー通院
- 6カ月に亘るインターフェロン投与の後、SVR（ウイルス学的著効達成）に至り、現在もC型肝炎ウイルスは検出されない状態が続いている。

ピカピカリンクの活用

- 大学病院の肝臓内科での検査データ、画像データをピカピカリンクで参照し、患者さんへの説明を実施
- かかりつけ医で採血したデータや観察された事項をWord文書でピカピカリンクにアップロードして大学診療につなげた。

ピカピカリンクの活用



大学病院の採血データ・画像データを基にかかりつけ医で患者説明を実施

■ ケース4　慢性C型肝炎のインターフェロン治療導入・実施連携

ピカピカリンクの活用メリット

- 当初、患者さんは、大学病院の受診は待ち時間が長くなることから受診を敬遠。大学病院での検査結果説明を、ピカピカリンクを活用してかかりつけ医で行うことを提案し、受診を受諾してもらい、待ち時間の短縮を実現できた。
- 大学病院でのC型肝炎のインターフェロン導入から、かかりつけ医での注射実施へ、スムーズにつなげることができた。これまで、同様の連携で、10例ほどインターフェロン治療を実施
- かかりつけ医で採血データなどをピカピカリンクのノート機能で呈示することにより、大学病院での重複検査を回避でき、待ち時間短縮も実現した。

ピカピカリンクの活用メリット

- 大学病院の受診では検査結果などの患者説明に十分な時間が割けない、あるいは患者さんも質問しにくいという声が多いが、かかりつけ医がピカピカリンクで診療情報を参照することによって、患者さんが納得できる十分な説明が可能になる。
- 従来のピカピカリンクでは主に処方、検査データ、画像データが閲覧可能だったが、佐賀県医療センター好生館のカルテ記事が開示されるようになり、紹介元担当医がどのような考えの下に診断し、治療を行ったか読み取ることができるようになった。
カルテ記事の開示・閲覧は開業医にとって福音。大学病院でも開示に向けた動きがあり、非常に有用性が高くなると考える。

2016/05/23 11:08 診療記事

＜当院腫瘍内科、　　先生よりコンサルト＞
平素よりお世話になっております。
2014年10月17日進行胃癌に対し幽門側胃切除＋胆摘＋横行結腸部分切除されています。
経過観察中に肝機能障害出現し、2016年4月27日CTで胆管拡張の増悪指摘、5月10日MRCPで左右肝管合流部直下で閉塞あり、
胃癌局所再発（リンパ節あるいは播種）、あるいは胆管癌の可能性あるということで本日当科紹介となりました。
治療方針決定のためにまずは胆管の処置、細胞診などが必要かと考えご相談させていただきます。

＃1　胆管閉塞
＃2　胃癌術後
2014年10月17日進行胃癌に対し幽門側胃切除＋胆摘＋横行結腸部分切除。por、Se、n1、H0、P+、stage IV。術後十二指腸断端瘻孔閉鎖不全あり。軽快後S-1による補助療法開始するも倦怠感強く継続困難であった。
経過観察中に肝機能障害出現し、2016年4月27日CTで胆管拡張の増悪指摘。5月10日MRCPで左右肝管合流部直下で閉塞あり。
胃癌局所再発（リンパ節あるいは播種）、あるいは胆管癌の可能性あり。
2016年5月19日当科紹介。
＃　腎障害
S-1内服後からとのこと。腎臓内科で薬物性といわれた。

【既往歴】2000年内反足手術。2016年白内障手術。輸血歴なし。アレルギー歴なし。
【生活歴】飲酒日本酒1合/日。喫煙10本/日。
【内服薬】　　病院よりモサプリド、フロセミド、カンデサルタン、ハイシー、メチコバール、ウルソ処方あり。
【アレルギー】
【家族歴】
【輸血歴】
血圧：mmHg 身長：cm 体重：kg BMI:　脈拍：回/分

胃切除後の再建方法はRou-en Y法であり、ERCPは困難か。
胃内スクリーニングの後、月曜日に検査方法について再度説明する。

手術記録はYahgeeに取り込み。

平成28年5月23日　GIF
異常なし、ピロリチェック

ダブルバルーン内視鏡を用いてERCPを行う方法と、PTCDで内外瘻チューブ留置して減黄する方法と2種類提案し、まずは内視鏡検査での検査および治療をご希望された。

P）5/26入院、5/27ERCP

好生館ではカルテ記事も開示

■ ケース5
人工透析患者の併発疾患治療における病病連携

【連携形態】白石共立病院（開示施設）× 佐賀大学医学部附属病院（開示施設）

【患者プロファイル】50歳代　男性　慢性腎不全（人工透析）、悪性リンパ腫

特定医療法人静便堂　白石共立病院　内科　斧沢　幸司　先生

経過

- 1990年代初頭より血液透析療法を白石共立病院で導入・実施。現在に至る。
- 2015年秋に頸部のリンパ節腫脹。腫瘍マーカー検査によりリンパ腫を疑う。
- 過去に佐賀大学医学部附属病院において甲状腺がん摘出手術を行っていたため転移を疑い、大学病院の耳鼻咽喉科に紹介
  家族の要望により、紹介時にピカピカリンクに患者登録
- 大学病院でリンパ節生検を行ったが陰性で、一旦自然軽快
- 2カ月後に再び腫脹が見られ再紹介。生検の結果、悪性リンパ腫を確定診断
- 白石共立病院で人工透析を行いながら、大学病院での化学療法開始を待つが、リンパ腫の影響で倦怠感が増し、食事も摂れなかったため白石共立病院に入院
- 大学病院に転院し、化学療法実施

ピカピカリンクの活用

- 大学病院への紹介時に、白石共立病院での血液検査データをピカピカリンクで提供
- 大学病院での腫瘍マーカー検査、リンパ節生検などの結果を白石共立病院の腎臓内科主治医がピカピカリンクで閲覧。診断に至る経緯を把握
- 大学病院入院中の経過、透析療法の状況をピカピカリンクで逐次閲覧

ピカピカリンクの活用メリット

- 紹介した自分の患者さんが、いつ腫瘍マーカー検査や病理検査を行ったのかということや、白血球数の変化や確定診断に至った経緯などをリアルタイムに把握できた。
  また、化学療法実施期間中の検査データ、治療経過など、自分の患者さんの状況を確認できた。
- 人工透析を行っている患者さんが心臓カテーテル治療を実施したときなど、低血圧が一時的に持ち直すことがある。ピカピカリンクでその状況を把握できていると、透析開始時の昇圧剤投与を回避できる。
- 佐賀県医療センター好生館を受診している患者さんはカルテ記事を参照できるため、次回検査予定なども把握可能。他院受診も含め、自分の透析患者さんを総合的に見守っていく環境を構築できる。

■ ケース6
MSWと介護施設による医療・介護連携

【連携形態】白石共立病院（開示施設）× 介護施設（閲覧施設）

特定医療法人静便堂　地域医療連携室長　MSW　武富　勝司　氏

背景

- 白石共立病院（佐賀県杵島郡白石町、一般病床108床・療養病床42床）は、2008年10月より近隣医療機関や介護施設との間でID-Linkを用いた地域連携を推進し、ピカピカリンク構築への先駆けとなった施設。
- 一方、南部医療連携協議会、白石町医療・介護等関係者連絡会、白石町高齢者見守りネットワーク連絡会、杵島地区自立支援協議会などに積極的に参画し、ケアマネジャー等との間に“顔が見える”信頼関係・連携関係を構築してきた。

医療・介護連携におけるピカピカリンク活用例

【 退院調整の効率化・充実 】

- 従来の退院調整の課題：
  紹介状、電話連絡、転院前訪問、退院カンファレンス等で情報共有が行われるが、手間がかかるうえに情報量に制約がある。

  ↓

  ピカピカリンクの活用：
  退院サマリー、退院時カンファレンス報告書等の提供により情報量が増加。最新の情報を提供できることにより退院調整が充実。各種情報の閲覧により患者の精神機能面やADL面の確認が可能

医療・介護連携におけるピカピカリンク活用例

【 介護施設との連携 】

- 退院時期を予測した準備：
  介護施設利用者が肺炎等で入院するケースが多いが、介護施設のケアマネジャーがピカピカリンクの活用で退院時期を予測。介護施設側の受け入れ準備が可能になった。また、入院中に使用した抗生剤などを参照。自施設での参考にできた。

【 ケアマネによる医学管理面の知識吸収 】

- ケアマネジャーは、ピカピカリンクで医療に関する情報を得ることで、医学管理の重要性を認識するようになる。その結果、通所サービス、ヘルパー利用時の食事や病態の観察項目などを意識できるようになったという声は多い。

医療・介護連携におけるピカピカリンク活用例

【 在宅患者におけるケアマネとの連携 】

- 糖尿病患者（高齢男性）の服薬管理：
  二人暮らしで共に障害者であるため服薬管理が不良だったが、担当ケアマネジャーがピカピカリンクで処方情報、検査データを確認のうえ服薬管理を徹底。血糖コントロールにつなげた。

ICTを活用した医療介護連携においては、両者の橋渡し役を担うMSW（医療ソーシャルワーカー）とケアマネジャーのヒューマンネットが欠かせない。